

續・生き甲斐といふ事

——補足として

(昭和四十六年一月書き下し)

一般の人々にとって生き甲斐といふのは子供の時から生き方の様式である。言ひ換へればそれは文化といふものだ。それは甚だ具體的なものである。寧ろ風俗行事に來りと言つた方がよい。

江戸時代には文化があった。町人や武士達には、利己心を適度に發揮し、そのぶつかり合ひを適当に調整し、また時には巧みにそれを捨てて整然たる様式になった。それを今日の吾々は、制度や法で解決できると、単純に思ひ込んでゐる。

文化の無い社会は、大衆社会であらうか、否か、空虚である事に變りはない。か今日のそれは、経済的繁栄と政治理念の喪失から生じたのではなく、明治以来徐々に行はれて來た傳統文化の破壊から生じたのである。それを救はうとして抽象的な生き甲斐や価値観を模索しても徒勞であらう。

人は、横の連帯感喪失には氣附いてゐる様だが、縱のそれは氣附いてゐない様だ。前者は後者の當然の帰結なのだ。過去の時間的連帯感を否定し拒絶することによって現代の連帯感・共同体意識が確立できると誤解してゐる。

だが、失はれた文化を早くも、しかも人為的に再建する事など、出来る筈が無い。
← 辛直に言つて 解決策など 何處にも無いのだ

性急に 解決策を提示した人々
それを ありがたく押し受かうとする人々
✓ 馴れ合ひと欺瞞

何よりも必要なのは、もうと自分を大仕事にすること
自分の本當の聲を耳を傾けること
不安感とか疎外感とか、現代の病状を手取り早く説明する
言葉の氾濫に足を揃はれぬ様にせねばならぬ。